



Data

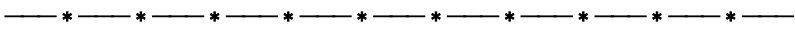
監督・脚本・編集：上田慎一郎
 出演：大澤数人／河野宏紀／富士た
 くや／北浦愛／上田耀介／
 清瀬やえこ／仁後亜由美／
 淡梨／三月達也／櫻井麻七
 ／川口貴弘／南久松真奈／
 津上理奈／小川未祐／原野
 拓巳／広瀬圭祐／宮島三郎
 ／山下一世

👁️👁️ みどころ

『カメラを止めるな!』(17年)は300万円の予算で31億円の大ヒット! 「カメ止め」現象を引き起こした上田慎一郎監督は一躍“時の人”になったが、彼は一発屋?それとも・・・?

それが問われる第2作にプレッシャーがかかるのは当然。そんな“茨の道”の中で彼が設定した主人公は、極度のプレッシャーを受けると気絶してしまうという売れない役者。そんな役者ではいい芝居ができないが、彼をフォローする弟がスペシャルアクターズに所属していたからラッキー。そして、ある日舞い込んだ「ムスピル教団から旅館めぶきを取り戻す」という大仕事で、兄弟が揃って潜入捜査に入る大芝居を演じることに。

映画で大切なのは脚本作りだが、スペシャルアクターズでもそれは同じ。しかし、潜入作戦から始まる大仕掛けの展開と総仕上げのシナリオは・・・? コリゃ、面白い!しかし、第2作も成功すれば、次の第3作は・・・?



■上田慎一郎監督は“一発屋”?それとも・・・?■

300万円の製作費で観客動員数220万人以上、そして31億円の興行収入。上田慎一郎監督の「カメ止め」こと『カメラを止めるな!』(17年)は、映画は低予算でもアイデア次第で大ヒットする可能性があることを実証した数少ない事例だ(『シネマ42』17頁)。

映画でも歌でも、世の中には、奇跡的に(偶発的に?)一発だけ大ヒットさせるケースがあるが、その場合、それは持続せず、第2弾、第3弾のヒットはおろか、一発だけで終わってしまうケースが多い。そのため、その人たちは“一発屋”と呼ばれるが、さて、上

田慎一郎監督はその一発屋？それとも・・・？

パンフレットの中には、上田慎一郎監督の“告白文(？)”が入っているが、そこでは、さまざまなプレッシャーの中での本作の完成がいかにかに“茨の道”だったかが赤裸々に語られている。しかし、「1人の売れない役者が緊張やプレッシャーで気絶しそうになりながら奮闘する話」である本作は、虚実がないまぜになった“彼の物語”だが、同時にこれは“僕の物語”にもなってしまったらしい。なぜなら、それは、彼が気絶しそうになりながら創った、自分を救う物語でもあるからだ。

本作のチラシには、『カメラを止めるな！』上田慎一郎監督作第2弾！」「この映画、予測不能。」「上田監督が贈るスペシャルエンタテインメント！！」「緊張すると気絶する役者VSカルト集団！？」の文言が躍っているが、それだけ見ると、本作は『カメラを止めるな！』の二番煎じの感も・・・？しかし、上田慎一郎監督は一発屋？それとも・・・？

■□■松竹ブロードキャスティングとは？その第7弾がコレ！■□■

埋もれている映画監督や脚本家、そして演技者たちの才能を発掘することが大切だから、世界各地でそのための努力が続けられ、さまざまな企画が組まれている。アメリカの西部ユタ州の都市パークシティで、1978年に映画監督で俳優のロバート・レッドフォードが、映画製作者たちをユタ州に惹きつけるのを狙いとして始めた「サンダンス映画祭」(当初はユタ・US映画祭)はその一例だが、松竹で2013年に始まったのが、「松竹ブロードキャスティングオリジナル映画プロジェクト」。これは、オリジナル脚本にこだわり、低予算ながら「作家主義」×「俳優発掘」を目指したものだが、本作のパンフレットにある「PRODUCTION NOTE」には、本作がこの「松竹ブロードキャスティングオリジナル映画プロジェクト」の第7弾として企画されたことが詳しく書かれている。

本作では、この10年でわずか3回しか芝居の仕事をしたことがないという“売れない役者”・大澤数人が主人公・大野和人役として採用された。映画は先に「物語」があって、その物語に合う「役者」をキャスティングするのが通例だが、上田監督の映画づくりはそうではなく、オーディションで「役者」を先に選抜し、その「役者」たちに合う「物語」をゼロから創りあげていくものだ。上田監督は“茨の道”を進む中で、この和人のキャラを緊張すると気絶してしまうという設定にしたが、すると物語は・・・？

■□■スペシャルアクターズのビジネスモデルは？■□■

歌舞伎の世界は厳格な世襲制だが、俳優や役者の世界はそうではなく、完全な実力主義。囲碁や将棋の世界もかつては「家元制」だったが、今は完全な実力主義になっている。もっとも、囲碁や将棋さらにスポーツの世界は実力主義が貫かれていても、映画や演劇の世界では人脈や運が大きく作用するから、そんな運も含めて実力のうちと考えるべきだ。すると、今は「売れない役者」だが、毎晩のように超能力を持ったヒーローが大活躍する映

画のビデオを観て演技の勉強をしている大野和人（大澤数人）の運と実力は？

富士松卓也（富士たくや）を社長とするスペシャルアクターズは、映画やドラマの仕事の他に、依頼者から受けた相談や悩み事などを役者によって解決する、つまり、演じることを使った何でも屋も引き受けていた。弁護士の世界も、「司法改革」が進み、法曹人口が増大する中、“商売がたき”が増大し、食えない弁護士が生まれてきた。そんな中で、今やさまざまな新しいビジネスモデルが模索されている。それと同じように、役者が独り立ちして生きていくのが難しい今の時代、スペシャルアクターズは役者の新しいビジネスモデルを考え出し実践しているわけだ。

ある日、和人は数年ぶりに弟の大野宏樹（河野宏紀）と再会したが、何といつの間にか彼も役者志望となり、現在スペシャルアクターズで働いているらしい。そして、兄の窮状を知った宏樹は、和人をスペシャルアクターズに誘うことに。極度に緊張すると気を失ってしまうという“持病”をもっている和人はスペシャルアクターズへの入社に躊躇したが、折りしも同社に入ってきた“ある仕事”を和人と宏樹が引き受けることに。“ある仕事”とは、旅館めぶきの女将である津川里奈（津上理奈）の妹の津川祐未（小川未祐）からのもので、「ムスビル」と称するカルト集団から旅館を守ってほしいという依頼だ。お礼はタップリという言葉と目の前に積まれた現金を見て、社長は当然これを受任。さあ、オカルト集団「ムスビル」を退治するために、シナリオ担当の田上陽介（上田耀介）はどんな脚本を書くの？また、依頼を達成するため、和人や宏樹をはじめとするスペシャルアクターズの役者たちは、それぞれいかなる役で、いかなる演技をするの・・・？

■□■いざ実践（１）！まずは潜入作戦から！■□■

1995年3月に地下鉄サリン事件を引き起こした犯罪集団がオウム真理教であった事は、その後の捜査と裁判で明らかにされたが、本作にはそれと似たような（？）カルト集団「ムスビル」が登場し、かなりの数の信者を集めているようなので、それに注目！

津川祐未の姉で、旅館めぶきの女将である津川里奈（津上理奈）は今その信者になり、旅館を無償で教団のために提供し、使用させているらしい。しかし、教祖の大和田多磨瑠（淡梨）と、彼を牛耳っている教祖の父大和田克樹（三月達也）、さらに、教団幹部の七海（櫻井麻七）、河田隆弘（川口貴弘）らは、めぶきの土地建物をそっくり贈与させてしまおうと企んでいるらしい。その全貌を暴くためには、信者を装った潜入作戦を敢行する他なし。そう考えたスペシャルアクターズのシナリオ担当である田上陽介（上田耀介）は、しっかりそのシナリオを完成させたが、さあ、誰がその潜入役を演じるの？

香港映画の名作『インファナル・アフェア』3部作（02～03年）（『シネマ3』79頁、『シネマ5』333頁、336頁、『シネマ7』223頁、『シネマ17』48頁）を見ても、潜入捜査がいかに大変かがよくわかるが、そこで敢然と立候補したのが宏樹。彼はもちろん、兄の和人も同行させるつもりだ。極度に緊張すれば気絶してしまうという病気持ちの和人が、「僕

にはとても無理！」と断ったのは当然だが、宏樹の強力な後押しによって、スペシャルアクターズの大プロジェクトの実践は、まず和人と宏樹による潜入作戦から始まることに。

■□■いざ実戦（２）！大仕掛け作戦の展開と成否は？■□■

ムスビルの教祖・大和田多磨瑠は、全く口がきけないけれども、超能力の持ち主らしい。そして、教祖の父・克樹だけは、教祖からのテレパシーを受けとめる能力があるらしい。それを演出し、信者たちにさまざまな“ムスビル商品”を売りつけるのが、幹部たちの仕事だ。

怪しい効能書きのついた各種“ムスビル商品”はほとんど原価がタダだから、ムスビルの会合に次々と信者を招き入れ、これらを売れば、教団の繁栄は約束されたも同然。本部として使用している旅館めぶきも、里奈から寄付させればタダで入手できる。そうなれば、東京の本部のみならず、あちこちに支部も作らなければ・・・。そんな思惑でムスビル教団はマニュアル本を作り、教団のさらなる拡大を目指していたから、逆に和人たち潜入捜査員の仕事は、そのマニュアル本を奪い取ることになる。

しかし、そのマニュアル本は、当然教団の奥深くに隠されていたから、そこに近づき、それを奪うためには、よほどうまい仕掛けをしなければ・・・。それも、シナリオ担当・田上の手腕と、ムスビル教団の集会に乗り込み、イチャモンをつけていくスペシャルアクターズの演技者たちがどこまで迫真の演技ができるかにかかっていた。さあ、そんな大規模な仕掛けの展開と成否は？

■□■いざ実戦（３）！総仕上げは如何に？■□■

ムスビルの教祖は、他人を恐がらせたり騙したりするのは得意だが、同時に意外にも相当な恐がり屋らしい。そんな情報を入手した田上は、旅館めぶきの番頭として働いている廣瀬（広瀬圭祐）の協力を得て、めぶきの中に“恐いお化け”が出るシナリオを書いた。教祖らがめぶきに泊まっている夜に、そんな怪談モノのストーリーをうまく展開させる中で、潜入捜査員を中心にある騒乱(?)を発生させ、その結果、殺人事件が発生！そんな事態になれば、警察が登場せざるを得なくなり、教祖や教祖の父、そして幹部たちは根こそぎ逮捕。そんな総仕上げが完成するのでは・・・？

そんなシナリオ本にするのなら、警察官を演じる役者も配置しなければならないが、ホントにそんな大規模な仕掛けが展開できるの？そして成功するの？もちろん、その渦中にいるスペシャルアクターズの役者たちは、自分がシナリオに沿って忠実に演じるだけだが、シナリオ外から、無理やりシナリオの中に巻き込まれてしまう教祖やその父、幹部たちは、本当にそれが現実なのか、演出なのかに気づかないの？それは、どうやら、スクリーン上を固唾をのんで見つめている私たち観客が、どこまでが現実でどこまでが演出か気づくかどうかにかかっているようだ。

しかして、スペシャルアクターズのシナリオ担当・田上の実力の程は？それは、ひいては本作を監督し、脚本を書いた上田慎一郎氏の実力をはかることにもなるのだが・・・。

2019（令和元）年9月27日記